

「わたしについてきなさい」

イザヤ書 第9章 1節～2節
マタイによる福音書 第4章 12節～25節

説教 岡村 恒牧師

「わたしについてきなさい。」主イエス・キリストがガリラヤの海辺で言われた言葉です。この言葉を聞いて、4人の漁師が網を捨て、船と父とを後に置いて主イエスに従って行きました。「わたしについてきなさい。」この言葉を聞いた人々は、自分の前に立ち、この自分自身に向かって語りかけて下さったお方のこの言葉に responding、すぐに網を捨てました。「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」主イエスのこの招きの言葉だけを聞いて新しい一歩を歩み始めたのです。

ガリラヤ湖にはどこにでも漁師がいたでしょう。しかしこの日、主イエスはシモンとアンデレに目をお留めになりました。誰も、自分の力で主を発見して出会う人はいません。自分で捜し出したように思えても、実は、神によって選ばれ、出会いの場へと導き出されたのです。私たちもまた主イエスに選ばれ、主イエスが私たちの日常に入って来て出会って下さったので、今、ここにいます。

主イエスに呼びかけられた人の反応には、2種類しかありません。応えて聞き従うか、聞き流して無視してしまうかです。シモンたちは、招きに応えて「網を捨て」て従いました。従わないではいられなかったのです。ヤコブとヨハネは、おそらく雇い人が居るような、比較的裕福な漁師だったと言われます。船と父とを後に置いて、つまり、それまでの人生全体を支えて来た基盤まで捨てて、ただ主イエスの背中を見ながら、従っていく人生を歩み始めたのです。

この出来事と同じ場面を、私たちはしばしばこの聖堂で目にします。人が罪の赦しの洗礼を受ける洗礼礼典です。洗礼を受ける人は、それまでその人の人生全体を支えてきたものを全部捨てて、主イエスに従い始めます。洗礼式において、その日まで生きてきた古い人は葬られ、新しい命を頂いて生き始めるからです。ガリラヤ湖畔で網を捨てた漁師たちのように、私たちもまた、自分自身の日常生活のまっただ中で網を捨てるようにと招かれたのです。

《あとをついていく人生》、それは、目標のある人生です。毎日毎日、変わらない、いわば円環をぐるぐる回るような人生から、一つの目標を定めてまっすぐに歩みだす。それが《あとをついていく》人生です。主イエスは、この日、四人の人を捉えて、ご自分のうしろに従う者として下さいました。私たちも、洗礼を受けると

同じことを味わうのです。それまでと全く変わらない人生を送っているように見えても、信仰者の人生は、ただ主イエスに従い、まっすぐに終わりを目指す人生に変えられているのです。

キリストの《招き》には力があります。人の人生全体をすっかり変えてしまう力です。主イエスは、普通の生活をごく普通に送っていた人の人生の真ん中、網を打ち、網をつくろっている彼らの人生の中心事に突入してこられました。主イエスの招きの声が発せられる時、「すぐに」従っていく、ということが本当に起こります。この「すぐに」という言葉は、聖書の中で、主イエスのお言葉によって特別な出来事が起こる時に、しばしば登場する言葉です。

私たちの常識や期待、理解できることは、このように「すぐに」は起こりません。手順を踏んで段々と変わるとか、少しずつ変化していくものです。ところが、神のひとり子、私たちの救い主、主イエス・キリストが私たちの人生に突入して、そこで御言葉をお語りになると、人間の思いを越えた神の御業、つまり奇跡が起こります。奇跡は、たちまち新しいことを起こします。決して神に従うことができない人間を創り変えてしまうのです。神を信じて生きることができない者に、神を信じる信仰を与えて、主イエスの言葉に応えさせ、主イエスに従って生きる者にしてしまうのです。

ところがシモンは後に、主を知らない、と3度も、徹底して拒絶した弟子です。〈わたしについてきたら良い〉とそう言われる主イエスに従うことができず、結局離れ去ってしまった弟子です。人は、結局だれも自分の力だけでは主に「従う」ことが出来ない存在なのです。

だからこそ、主イエスは十字架への道を歩まれたのです。従うことができない者を、後ろに従えるために。滅びゆく者を、やがて確かに神の国に迎え入れるために、主イエスは十字架へと歩まれたのです。復活された主イエスは、約束通り助け主なる聖霊を弟子たちに注いで下さいました。そうして、主の招きの力がいつも、いつまでも私たちの内に留まって、主に従う歩みを支えて下さるようになりました。だから私たちは、「すぐに」、そして「捨てて」、主イエスの招きに答えて歩み出して良いのです。

(記 岡村 恒)